

MIRAI REPORT

ISSUE. 022

▶NoMaps釧路・根室2024 vol.2

I カンファレンス3 「地域の魅力を活かしたサウナ・コンテンツ」

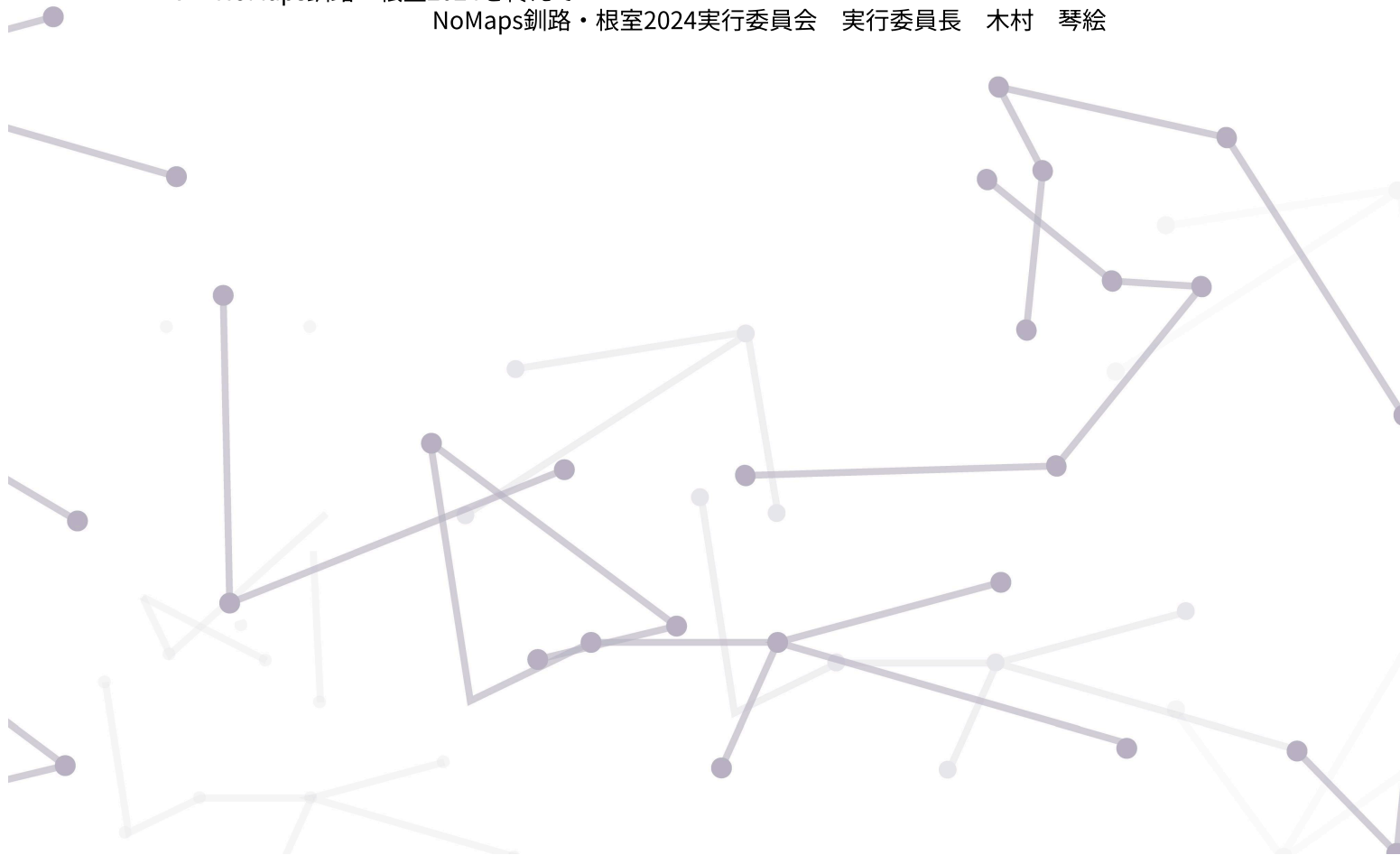
II カンファレンス4 「地域づくりとネイチャーポジティブ」

III カンファレンス5 「地域養殖ビジネスの展望」

IV 高校生ビジネス&地方創生コンペティション

V NoMaps釧路・根室2024を終えて

NoMaps釧路・根室2024実行委員会 実行委員長 木村 琴絵



NoMaps 釧路・根室 2024



11.21 木 港まちベース
946BANYA

現地参加・オンライン同時開催

Conference III

14:20-15:20

地域の魅力を活かした サウナ・コンテンツ

サウナブームは衰えることなく、一層その利用者は拡大し、今やブームから日常の文化として定着し、また地域では必須の観光コンテンツとなりつつあります。近年、釧路、根室地域でも恵まれた自然を活かした特徴あるサウナが誕生し、今後益々、その事業展開が期待されています。今回、地元の強みを整理し、サウナ・コンテンツの将来像についてディスカッションしていただきました。

パネラー



フィンランド・サボリンナ市
声楽家・元市議会議員

岡部シルヴァステイ
千栄子氏



しきじの娘
トータルサウナプロデューサー

笹野 美紀恵氏



有限会社湯宿だいいち
代表取締役

長谷川 周栄氏

モデレーター



合同会社
Hokkaido Design Code
代表

木村 琴絵氏

パネラー

岡部 シルヴァステイ 千栄子氏

名古屋市出身。幼少時代から叔母が音楽教師であったことからピアノの英才教育を受け、米国～ドイツに留学。最終的にオペラ歌手として西欧の様々な歌劇場で活躍後、サヴォンリンナ市立芸術劇高校にて、オペラ、ミュージカル科の主任を務める。州立文化財団実行委員や市議会議員を経て、日本・フィンランド間の様々な国際交流企画に携わったことから、日本大使館から表彰、フィンランド国からも勲章受章。

生活面において、フィンランドと日本のお風呂は形が違うだけでサウナがフィンランド人のお風呂となっています。ビジネス面でも公共施設にお客さまを迎えられる大きなサウナ施設があり、文字通り裸の付き合いでビジネスが決まるということがあります。

歴史と共にサウナの入り方が違ってきているのを近年特に感じます。大型スパ施設がフィンランド人の家族の休暇の1つのメインだったのですが、コロナ禍を経てコンテナサウナやシャワールームが設置された無人

のネット予約できるキャンプ場が大変増えました。

サウナグッズとして、木のヤニを使用した石鹸やシャンプー、アロマオイルを加えるロウリュ用の水、体を洗うためのブラシ、白樺の枝を束ねたヴィヒタなどがあり、サウナのリラクゼーション効果を高めるアイテムとして親しまれています。

パネラー 笹野 美紀恵氏

高校、大学をアメリカ合衆国にて過ごす。2008年、ミスインターナショナル・ファイナリスト受賞、美の親善大使に任命。2011年、株式会社ONEBLOWを設立。2024年、診療所の併設するサウナをプロデュースした宮城県延岡市の大貴診療所が「第17回延岡市景観賞」で最優秀を受賞。あかん遊久の里にて世界初、ペアガラスドームサウナをプロデュース。

静岡の「サウナしきじ」の娘として育ち、国内外のサウナを巡りながら、日本独自のサウナ文化を創出することを目指しています。

サウナは単なる入浴施設ではなく、健康増進やコミュニケーションの場としての役割を果たします。

特に、PMS（月経前症候群）に対するサウナの効果について、医療機関とともにデータを集めています。最近の研究では、サウナが自律神経の調整やホルモンバランスの安定に寄与すると示唆されています。

また、サウナのもう一つの大きな利点はデジタルデトックスです。サウナ内ではスマートフォンを使用できないため、自然とリラックスでき、ストレス解消に効果的です。

道東地域はサウナに適した環境を持ち、観光資源としての可能性が高いと考えています。私はこれまで道東でのサウナツアーを実施し、観光客に新たな体験を提供してきました。今後も地域資源を活かし、道東をサウナの聖地として発展させるための取り組みを続けていきます。

パネラー 長谷川周栄氏

高校卒業まで地元中標津で育ち、高校卒業後、サンフランシスコへ留学。2001年、ハワイの大学を卒業後帝国ホテルへ入社。2003年に実家である湯宿だいいちに入社し2021年から現職。近年では北海道ホテル旅館生活衛生同業組合 副理事長や日本旅館組合北海道支部 理事を務めている。産湯が源泉かけ流しの温泉だったことから、生粋の温泉人間。2020年、「ととのえ親方」にサウナの入り方を教わってからはサウナが大好きに。全国をサ旅しており、今年5月にはフィンランド・ノルウェーをサ旅。湯宿だいいちも今年8月にサウナを新設。

もともと温泉旅館で生まれて、温泉が大好きだったのですが、2019年にサウナの入り方を教えてもらってからサウナにハマり、国内外のサウナを巡っています。特にフィンランドのサウナ文化に触れたことが大きな転機となりました。フィンランドでは、サウナが日常生活の一部であり、ビジネスの場や家族のコミュニケーションの場として機能しています。この文化を日本にも取り入れ、温泉旅館の新たな価値を創出したと考えています。

現在、道東地域において「サウナロード」の構築を計画中です。これは、各地の特色あるサウナ施設を結びつけ、観光客にサウナを軸とした旅を提供するものです。地域資源を活かし、サウナを観光の中心に据えることで、地域経済の活性化にも寄与したいと考えています。

また、サウナがもたらす健康効果にも注目しています。サウナと温泉を組み合わせることで、より効果的なリラックスや美容・健康増進が期待できます。例えば、温泉の冷水を活用した水風呂の導入など、新しい試みを行っています。

モデレーター 木村琴絵氏

合同会社Hokkaido Design Code代表社員。釧路市DXアドバイザーや福井県DX推進アドバイザーなど、各地のDXを支援。NoMaps釧路・根室2024実行委員長。

サウナは単なるブームを超え、地域観光に不可欠な要素となっています。私自身、釧路の自然に魅了され、「港まちベース 946BANYA」の運営を通じて地域の魅力を発信してきました。その一環として、サウナを観光資源として活用することを模索しています。釧路は豊かな自然と美しい景色に恵まれ、地域特有のサウナ体験を提供できるポテンシャルを持っています。

特に私が注目しているのは、ランドスケープを活かしたサウナの展開です。昨年、「道東サ旅」として、サウナ愛好者とともに道東を巡るツアーを実施しました。また、網走の「北天の丘 IZUBA」に訪れた際には、サウナが観光と地域振興に大きく寄与する可能性を実感しました。こうした地域独自の魅力を活かし、釧路ならではのサウナ文化を確立することが重要だと考えています。

*カンファレンス内容の一部を要約しています。カンファレンス3の全文は下記に動画を掲載しています。ぜひご覧ください。

YouTube「NoMaps釧路・根室」で検索🔍

<https://www.youtube.com/watch?v=lyPLQw-ZnoE>

NoMaps 釧路・根室 2024



11.21 木 港まちベース
946BANYA

現地参加・オンライン同時開催

Conference IV

15:40-16:40

地域づくりとネイチャーポジティブ

ネイチャーポジティブ(自然再興)とは、人間活動がダメージを与えてきた自然に対し、その損失を食い止め、さらにはそれを反転させ、自然を再興させるグローバルな社会目標といえます。地域づくりを、ネイチャーポジティブの視点も含めた多様な切り口からディスカッションしていただきました。

パネラー



AGC株式会社
環境安全品質本部環境安全部
環境チームリーダー

宮崎 俊幸氏



羅白町長

湊屋 稔氏

モデレーター



北海道大学大学院
工学研究院 教授

石井 一英氏

パネラー 宮崎 俊幸氏

東京都生まれ。早稲田大学大学院機械工学科修士修了。2019年から現職。化学品・ガラス工場の環境管理を担当、環境マネジメントシステムを運用する傍ら、省エネルギー、廃棄物リサイクル、排水管理強化などに貢献。本社環境部門にて、環境経営戦略の立案、GHG排出量削減目標の立案と達成に向けた活動の推進、環境経営のバリューチェーン全体への拡大などを担当。

AGC株式会社（以下AGC）は、ガラス製品や化学製品を手掛けるグローバル企業であり、2050年カーボンニュートラルの達成を目指すとともに、資源循環の強化にも取り組んでいます。

具体的な取り組みとして、「ガラスリサイクル」を推進しています。ガラスは適切にリサイクルすれば、再生利用が可能であり、エネルギー消費やCO₂排出の削減につながります。しかし、現状では解体現場でガラスとコンクリートが混在し、リサイクルが困難な状況にあります。

このため、AGCはガラスリサイクルの仕組みを社会全体で構築することに取り組んでいます。

また、環境に配慮した製品の開発にも力を入れており、高断熱ガラスは建築物のエネルギー消費を抑え、CO₂排出の削減に貢献します。さらに、ビルの窓ガラスに太陽光発電セルを組み込む技術も開発し、都市部における再生可能エネルギーの利用拡大を進めています。

AGCがネイチャーポジティブに取り組む理由は、単なるCSR（企業の社会的責任）ではなく、企業価値の向上につながるからです。環境配慮型の製品や技術を提供することで市場競争力を高め、事業の成長と持続可能な社会の実現を両立させることを目指しています。

※カンファレンス内容の一部を要約しています。
カンファレンス4の全容は下記に動画を掲載しています。
ぜひご覧ください。
YouTube「NoMaps釧路・根室」で検索🔍

<https://www.youtube.com/watch?v=IEbcU9sBTcs>

パネラー 湊屋稔氏

羅臼町出身。函館大学卒業後、家業である湊屋漁業に従事。1999年、羅臼町の新たな産業創出を目的に羅臼沖から汲み上げた、「海洋深層水」を飲料水として販売するため、有限会社らうす海洋深層水を設立し、初代代表取締役役に就任。2007年、羅臼町町議に当選。2015年、羅臼町町議を務めた後、羅臼町長に就任。現在3期目。

モデレーター 石井一英氏

札幌市生まれ。北海道大学大学院工学研究科博士後期課程中退。1997年より北海道大学大学院工学研究科勤務、2018年より現職。循環共生システム研究室にて、教育・研究を通じて50年先を見据えたものとエネルギーの「循環」システムの在り方を考える。

(一社)日本有機資源協会理事、NPOバイオマス北海道理事長、環境省、農水省、北海道、札幌市、釧路市などの委員多数。

羅臼町は知床半島に位置し、豊かな自然環境に恵まれている一方で、人と野生動物の共存が課題となっています。特に熊との関係については、住民が日常的に向き合う問題であり、町としても「熊学習」を幼児教育に取り入れるなど、地域住民の意識向上を図っています。熊学習では、幼稚園児に対して熊と出会わないためにはどうするか、また、遭遇した際の適切な対応などを教えています。これは、単なる危険回避のためではなく、野生動物と共存する意識を育むための学習となっています。

羅臼町では観光資源としての自然の活用にも力を入れています。タンチョウ、エゾシマフクロウ、流氷に乗ったオオワシは外国人に人気であり、これらの鳥は2月から4月に根室・釧路地方で見ることができ、バードウォッチングツアーの推進、自然を生かした持続可能な観光業の発展を目指しています。

羅臼町の人々はこれまで自然と共生してきましたが、改めて自分たちの役割を考え直す必要があると考えています。そして、持続可能な地域づくりのために、地域住民が環境意識を高め、自然の恩恵を最大限に活かしながら、次世代に豊かな環境を残していくことが重要だと思っています。

また、近年の気候変動の影響により、羅臼町周辺の漁業資源が変化しています。従来の漁獲量が減少する中、海洋資源を持続的に利用するための試みとして、特定の期間、漁船を釣り船に転換する漁業者もいます。この他にも、海洋深層水を活用した製塩、飲用水などの製造に取り組んでいます。自分自身も漁師の経験を持っているため、自然からの恩恵を受けている以上、それを守りながら活用することが重要だと考えています。

ネイチャーポジティブとは、自然環境の損失を止め、回復させることで、人間活動が生態系に対して正の影響を与えることを目的とする考え方です。これを単なる環境保護の枠に留めるのではなく、地域社会や経済発展と結びつけることが重要です。

産業革命以降、「自然的循環」だけではなく、地下資源を人的に循環させる「人為的循環」も行われるようになりました。結果として、地球環境は深刻な影響を受けており、脱炭素や循環型社会の構築が求められています。

しかし、私は環境問題を単なる負担と捉えるのではなく、地域課題を解決するための「手段」と考えています。観光、新規産業、地域交通などの地域課題という山を上る際、エネルギーになるのは人材、自然、企業などの地域資源です。山を上る途中に脱炭素やサーキュラーエコノミーといった看板と出会い、国の施策と連動して将来の街づくりに利用していくことが大切だと思います。

企業の環境対策はブランドイメージを良くすることが主な目的でしたが、現在は企業価値に関わる重要なものに変化しています。

NoMaps 釧路・根室 2024



11.21 木 港まちベース
946BANYA

現地参加・オンライン同時開催

Conference V

17:00 - 18:00

地域養殖ビジネスの展望

日本の漁業生産量が減少傾向にある中、国内でも地域養殖ビジネスが注目されています。ここでは、国内における地域養殖ビジネスが抱える課題を取りあげ、最先端の技術と養殖ビジネスの実績をもつノルウェーの養殖産業化の成功要因にヒントを得つつ、今後の地域養殖ビジネスの展望についてディスカッションしていただきました。

パネラー



ノルウェー ベルゲン大学
数学・自然科学学部生物学科
准教授

トム・ニールセン 氏



釧路市養殖事業
調査研究協議会
会長

市原 義久 氏



日本サーモンファーム株式会社
代表取締役社長

鈴木 宏介 氏



北海道大学
大学院水産科学研究院
地域水産業共創センター
特定専門職員

三瓶 真 氏

モデレーター



北海道大学
大学院水産科学研究院
地域水産業共創センター
教授

福田 寛 氏

パネラー

トム・ニールセン 氏

2007年、ノルウェー ベルゲン大学にて大学院博士課程修了。2020年からベルゲン大学や、ノルウェーリサーチセンターで研究員、2019年から現職の大学准教授（生物化学科）となる。専門は魚類生理学。ノルウェーのサーモン養殖産業における研究・人材育成の面で中核をなす、ベルゲン大学 養殖研究グループの主要メンバー。

ノルウェーは、近年アトランティックサーモンの養殖に注力しています。養殖業は国の主要産業の一つとなり、2023年の生産額は約2兆円に達しました。そのうち75%が養殖によるものであり、付加価値の高い産業として成長を遂げています。ノルウェーの養殖業は、陸上で100g程度に育てた稚魚を海面養殖に移す伝統的な方法から、より成長した状態で海に移す技術へと進化しています。

特に陸上循環養殖（RAS：Recirculating Aquaculture System）の発展により、水の使用効率が向上し、病気のリスクが低減されました。さらに、魚病管理のためのワクチン開発、漁業規制の強化、環境への配慮を組み合わせた戦略が成功の鍵となっています。

今後は、生産量を現在の140万トンから2050年までに500万トンに増やすことを目標とし、閉鎖式海洋養殖、洋上養殖、陸上完全養殖の3つのモデルの技術開発を進めています。

パネラー 市原 義久 氏

1986年3月北海学園大学法学部卒業。1986年10月より釧路市役所勤務。釧路地域の産業振興、道路、河川、港湾整備、水産関係事業などに携わり、2024年3月退職。2024年5月より現職。現在は釧路市養殖事業調査研究協議会 会長も務めている。

釧路はかつて130万トンの水揚げがあったものの、現在は20万トンに減少し、地域の水産加工業に大きな影響を与えています。そのため、安定した水産資源の確保を目指し、養殖事業を立ち上げました。2022年から本格的に取り組みを開始し、トラウトサーモンの養殖試験を実施しました。実験は防波堤のある釧路港沖で行い、1.2kgの稚魚4000尾を放流。順化期間を経て育成し、最終的に2.3kgまで成長させました。収穫した魚は「くしろ 茜 サーモン」として販売され、一定の評価を得ています。

この取り組みの課題は、生産規模の拡大とコスト削減、地元企業との協力体制の構築です。特に、地域資源を活用した養殖ビジネスの確立が求められます。今後は、地域の漁業者や加工業者と連携し、持続可能な水産業の発展を目指します。

パネラー 鈴木 宏介氏

千葉県出身。東京水産大学（現東京海洋大学）卒業後、株式会社オカムラ食品工業に入社。2017年、日本サーモンファーム取締役に就任、2020年から現職。2023年には、北海道大学大学院水産科学研究所の特任准教授、2024年、株式会社オカムラ食品工業執行役員養殖事業統括も兼任

私が代表を務める日本サーモンファーム株式会社は、青森県を拠点とし、トラウトサーモンの養殖を行っています。

当社は親会社であるオカムラ食品工業とともに、国内外でサーモン加工・販売事業を展開しており、生産から加工、販売までの一貫体制を構築しています。

日本国内のサーモン養殖は宮城県や岩手県で活発に行われていますが、多くは卵の孵化から加工・販売が分業化されています。一方で当社は、卵の孵化から加工・販売までを垂直統合することで、生産効率を高め、付加価値のある製品を市場に提供する体制を整えています。現在、青森県で年間2700トンの生産を行い、来年度には3500トンに増産する計画です。しかし、ノルウェーの1つのイケースで5000トンを生産する規模には及びません。日本の養殖業が国際競争力を持つためには、大規模な生産体制の構築だけでなく、日本ならではの水産資源管理との調和が必要です。養殖業と漁業のバランスを考えながら、日本の特性に合った持続可能な生産体制を模索していきます。

パネラー 三瓶 真氏

2002年、石巻専修大学大学院博士課程修了（理学博士）。その後、国立極地研究所やカナダ国ラバール大学理工学部においてポスドク研究員・助手を務める。その後、広島大学や北海道大学で特任講師や特任助教となる。2020年には、（一財）函館国際水産・海洋都市推進機構 調査・研究部門のプロジェクトマネージャーとなり、2022年から現職。

三瓶氏には、トム・ニールセン氏の通訳および要約をしていただきました。

モデレーター 福田 覚氏

2003年、北海道大学大学院水産化学研究科博士後期課程修了。主任研究員を経た後、弘前大学食料科学研究所、同大学地域戦略研究所の准教授となる。2022年から現職。

地域水産業共創センターは2022年に設立され、函館市にある水産学部で地域連携強化と産学官連携を担当しています。

世界的には漁業・養殖生産量が30年で2倍以上拡大しており、成長産業とされています。特に、養殖生産量は増加しており、近年海面漁獲量を超える生産量となっています。一方で、日本の漁業・養殖生産量は1990年頃をピークに減少しており、30年で約1/3に減っています。

日本と世界を比較したとき、海面漁獲量が横ばい、もしくは減少している点は同じですが、日本における養殖生産量の伸び率は低くなっています。世界的に養殖生産量が増加している昨今、日本にも成長の余地はあると考えています。

今後、天然資源の減少を補いながら安定した供給を確保する手段として、養殖業の発展が必要だと考えています。

*カンファレンス内容の一部を要約しています。カンファレンス5の全容は下記に動画を掲載しています。ぜひご覧ください。

YouTube「NoMaps釧路・根室」で検索🔍

<https://www.youtube.com/watch?v=QPYbptXkfJk&>

高校生ビジネス&地方創生コンペティション

日時 2024年12月19日 (木)
場所 釧路プリンスホテル

釧路・根室管内の高校生が、地元の現状課題を検討分析し、産業振興や地域活性化に資するビジネスプランを創造する機会を通じて、高校生の起業家精神を育み、人材育成を図ることを目的に実施している事業で、第6回目を開催いたしました。今回は13校29チーム127名の応募をいただき、書類選考を経て当日は13校20チーム91名が発表いたしました。

- 参加校 阿寒高校 1チーム1名/標茶高校 4チーム18名 / 釧路湖陵高校 4チーム17名
釧路湖陵高校定時制 1チーム2名 / 釧路江南高校 1チーム1名
釧路東高校 1チーム4名 / 白糠高校 1チーム5名 / 厚岸翔洋高校 3チーム7名
霧多布高校 1チーム4名 / 弟子屈高校 1チーム2名 / 根室高校 1チーム6名
中標津農業高校 1チーム4名
- 審査員長 伊藤 博之 (クリプトン・フューチャー・メディア株式会社 代表取締役)
- 審査員 木村 琴絵 (合同会社Hokkaido Design Code)
泉野 将司 (北海道教育庁釧路教育局 局長)
遠藤 直俊 (北海道教育庁根室教育局 局長)
中村 研二 (釧路公立大学 地域経済研究センター長、教授)
大塚 友彦 (釧路工業高等専門学校 理事・校長)
伊藤 哲也 (大地みらい信用金庫 理事長)

■結果

賞	高校名	チーム名	発表名
最優秀賞	厚岸翔洋高校	海洋資源科 生産コース	水産業のDX化に挑戦 ～熟練漁師の経験値をデータ化してみた～
優秀賞	中標津農業高校	肉加工研究班	エゾシカをプロデュース ～目指せ！SDGsに向けたエゾシカ普及計画～
優秀賞	標茶高校	食品ゼミ鹿班	標高から全国へ ～課題で見つけるまちの魅力～
みらい賞	厚岸翔洋高校	かまかま探検隊	厚岸の未利用魚・低利用魚の活用 ～アメマスの活用方法についての研究～
みらい賞	釧路江南高校	釧路の防災	釧路の防災
みらい賞	厚岸翔洋高校	厚岸スタンプラリー班	スタンプラリーで厚岸の魅力発信！！
みらい賞	標茶高校	UNICORN	Pet Food Project
審査員特別賞	釧路東高校	合笑部	食事から始まる釧路の魅力度UP計画
審査員特別賞	標津高校	知羅海水族団	私たちにできる標津町改良計画



NoMaps釧路・根室を終えて

NoMaps釧路・根室2024実行委員会 実行委員長 木村 琴絵



NoMaps釧路・根室2024が無事に終了しました。実行委員長として、このカンファレンスに携われたことを大変光栄に思います。ご参加いただいた皆さま、登壇者の皆さま、そして運営にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

今回のNoMaps釧路・根室は、アカデミックでありながらグローバルな視点も交えた、新たな試みとなりました。他のカンファレンスとは異なる知見が集まり、道東ならではの課題や可能性を多角的に議論する貴重な機会となりました。

私自身は「サウナセッション」に登壇し、道東のサウナ観光の可能性について議論しました。寒冷地特有のライフスタイルとしてのサウナの魅力や、観光資源としての活用、地域経済との結びつきなど、幅広い視点からの意見交換が行われました。また、フィンランドからのWeb登壇により、本場のサウナ文化や国際的な視点も加わり、議論の深まりを感じました。

多岐にわたるテーマが扱われた中で、地域DXや人材育成の重要性が改めて浮かび上がりました。物流問題についても、北海道という広大な土地を陸路で輸送する難しさが明確となり、地域特有の課題に応じた解決策の必要性が認識されました。また、ガストロミーツーリズムの可能性が再確認され、道東の食文化を活かした観光コンテンツの発展に向けた意見が交わされました。

さらに、ネイチャーポジティブをテーマにしたセッションでは、自然環境の保全と地域経済の両立に向けた新たな取り組みが求められていることが浮き彫りになりました。養殖ビジネスの可能性についても、道東の海洋資源を活用した持続可能な水産業の未来が議論され、特にノルウェーで成功している養殖の事例が現地からのWeb登壇で紹介され、北海道の水産業に活かせる実践的な知見が共有されました。

NoMaps釧路・根室は、単なる議論の場にとどまらず、具体的なアクションにつながる場であるべきです。本カンファレンスを通じて生まれたネットワークやアイデアを活かし、持続可能な地域の未来を共に創っていきましょう。

最後に、改めてご参加いただいた皆様に感謝を申し上げますとともに、来年のNoMaps釧路・根室で再びお会いできることを楽しみにしています。





2025.3

MIRAI REPORT ISSUE.022

 **大地**みらい信用金庫 経営企画部
地域みらい創造センター